

「文化」と「非効率性」を考える

富山大学長

遠藤 俊郎 氏



私は、1979年秋に当時新設された

富山医科薬科大学に着任し、脳神経外科医・大学人として約40年を富山で過ごしてまいりました。2011年からは、2005年に誕生した国立大学法人富山大学の2代目学長として、多くの皆様に支えていただきながらその運営／経営に当たってまいりました。2018年4月からは「全学部教養教育の五福キャンパス一元化」及び「都市デザイン学部」がスタートし、富山大学にも新たな歴史が刻まれています。今回は機関誌「創造」のエッセイ執筆のご指名を頂きましたので、これまで生きてきた日々を振り返りつつ、新しい時代に夢を抱きながら、最近こだわりを感じているふたつの思いに

つき書き留めてみます。

一つは、言葉のもつ意味の大切さと違いについてです。典型的な例が「文化 culture」と文明 civilization」です。辞書には以下の記載があります。

広義の「文化」は、人間がつくり出した精神的、物質的な成果のすべてを表わし、「文明」を含んだ広い意味となる。一方狭義の意味での「文化」は学問、芸術、道徳、宗教など人間の精神の働きによって作り出されたものをさし、「文明」は人間の外面的な生活条件や秩序など物質的存在をさし、使い分けられる。

世界は今まさに「人の能力と人を越える能力が重なりあう改革の時代」を迎えています。近未来には、人工知能と人類の共存は必須の世の中となることでしょう。同時に、変化が生み出す不確定で不安定な社会経済情勢に対し、世界の国々は新たな秩序形成を模索し、その影響は人々の人生観や倫理観をも変えようとしています。特に自身が関わってきた医療と教育の現場では、人の命と人生に直接関わる分野ゆえに、将来の形を求める探求と研鑽の道は複雑で、困難さを増していることを強く感じます。

即ち、近年の歴史の中で、進歩・普及したのは「文明」であり、「文化」の存

在はいささか軽んじられてきたのではなにか？ 医学・医療界で言えば、先進医療は「文明」の象徴で、その進歩が患者さんの人としての倫理感や生き方・「文化」を大きく変えようとしているのではないかと。そんな思いが募ります。

それ以外にも「知能 (intelligence) と知性 (intellect)」「会話 (conversation) と対話 (dialogue)」「プロフェッションとエキスパート/スペシャリスト」など、気になる言葉はつきません。

もう一つのこだわりは、非効率性や不便さを楽しむ時間/生活の楽しみ方です。例えば私は、マイペースでゆったりと走る自転車が好きです。海から山へ、変化する自然を楽しみながら、様々な気づきに出会う時間、車では決して体験できない異質の世界です。また最近偶然に体験し、日々の習慣となったことが一つあります。それはコーヒーをペーパードリップで入れることです。日頃豆を購入していた近所のお店で初級者講習会に、何気なく参加したことがきっかけでした。「美味しいコーヒーを入れるために必要なものは蒸らしです。最初に適温に調整したお湯を、専用ポットから約20ccコーヒーにそっと優しく注ぎ、まんべんなくお湯を含ませ、そのまま20秒ほど待ちます。」で始まる、味わい深い一連の作業にすっかりはまってしまうました。マスターの締めの一言、「効率ばかりでは薄っ

ぺらになります。非効率なこと、一手間かけること、これが物事を味わい深くするのではないのでしょうか」、を付け加えておきます。

最後になりますが、現在国立大学を取り巻く環境は、年々厳しいものとなっております。私は、「日本の文化・学問」を考え、育てるために国立大学が果たしてきた役割は大きく、それは今後も変わらないと信じています。しかし同時に、大学人が「危機意識を持たず、安易な現状維持」のみを求めるならば、それは大学としての役割を自ら放棄するもので、社会/人々の期待を裏切るものと考えています。大学にとどまらず、次の世代を生きる皆さんが、己のプライドを持ち、心豊かに生きることのできる新たな世界を創出して下さること心より願っています。

プロフィール

遠藤 俊郎 (えんどう しゅんろう)

国立大学法人 富山大学長

1946年宮城県仙台市生まれ。医学博士。71年東北大学医学部医学科卒業、77年同附属病院脳神経外科助手。80年より富山医科薬科大学(現富山大学)医学部脳神経外科助教授、99年より同脳神経外科教授を歴任する。2009年より同附属病院長。11年4月より富山大学長に就任。